

ANNUAL REPORT 2019

事業報告書



日本自然
保護協会

The Nature Conservation
Society of Japan

自然のちからで、
明日をひらく。



自然のちからで、明日をひらく。

日本自然保護協会（NACS-J）は、
人と自然が共に生き、
赤ちゃんから高齢者までが
美しく豊かな自然に囲まれ、
笑顔で生活できる社会の構築に貢献します。

日本自然保護協会は、
2019年度も皆さまからのご支援を受け、
幅広い自然保護活動を進めることができました。
皆さまのご支援に心より感謝申し上げます。

理事長挨拶



公益財団法人 日本自然保護協会
理事長

龜 山 章

私たちは、この一年間、会員をはじめとする多くの皆さまとともに、様々な活動を行ってまいりました。

絶滅危惧種や壊れそうな自然を守る活動は、日本自然保護協会が発足以来70年の間、一貫して取り組んできたものです。近年では、特に海の自然保護を大きなテーマとしており、辺野古・大浦湾のサンゴ群集とジュゴンの保護、砂浜などの沿岸域の保護問題に重点を置いています。辺野古・大浦湾一帯はホープスポットに認定され、その価値が大きなものであることがより一層明確にされました。絶滅危惧種のサシバは、本州から沖縄の宮古島を経てフィリピン・ルソン島をルートにする渡り鳥ですが、その保護は、子どもたちの俳句コンテストも交えて広範に進められ、国際サシバサミット市貝に結実しています。自

然で地域を元気にする活動は、ユネスコエコパークの指定と管理を通じて宮崎県綾、群馬県みなかみ、山梨県南アルプス、長野県志賀高原など各地で展開されています。自然の守り手を増やす活動は、自然観察指導員の養成事業が40年以上続けられ、指導員は協会の会員の大半を構成するようになっています。また、市民による市民のための市民科学を目指すモニタリングサイト1000里地調査では、10年以上の調査の成果が蓄積され、2019年はその成果をまとめて里地の生きものの絶滅危機の状態を社会に発信することができました。

気候変動やコロナ禍の影響など、地球規模で人と自然のかかわり方の見直しが必要となる時代に、これまでの活動をさらに発展させて自然と共生する社会を目指し、協会の新たな歴史を刻んでゆきたいと念じています。

力を入れる重点事業

緊急

なくなりそうな自然を守る

1

日本の絶滅危惧種を守る

2

自然で地域を元気にする

3

自然の守り手を増やす

2020年に向けた6つの目標

日本自然保護協会は、自然保護活動を力強く推進するために、2016年から2020年までの中間目標として以下の6つを掲げ、自然保護の着実な前進と経営基盤の強化に努めています。



自然を守り生物多様性の損失を食い止めた
現場実績を増やし、自然保護のしくみや
制度づくりの実績を増加させる。



生物多様性・自然のちからを活かした
モデルとなる地域づくりの実例を増加させる。



市民の自然とのふれあいの機会や
「自然のちから」の理解の場を増加させる。



会員・支援者に支えられる自然保護NGOとして、
多角的な支援を得る。



自然保護活動の連携を強化し、
日本自然保護協会の認知度を飛躍的に伸ばす。



他分野の支援を得て、段階的能力開発、
働きやすい職場環境を構築する。



緊急

なくなりそうな自然を守る

ハイライト 海の自然を守る

日本自然保護協会は、尾瀬や白神山地のブナ林、群馬県の赤谷の森など、陸域を代表する豊かな自然を未来に受け継ぐしくみをつくってきました。しかし、海の自然保護は陸よりも大きく遅れており、緊急に力を注ぐ必要に迫られています。日本の海を取り巻く問題と活動をご紹介します。

提供：
上関ネイチャープロジェクト

text by:

保護部 志村 智子

見過ごされてきた海の危機

2011年、国連生物多様性条約（CBD）事務局が「地球規模生物多様性概況第3版」（GBO3）の中で、世界的な生物の絶滅のおそれの状況を分類群ごとに表す指標を発表しました。すべての生物が減少傾向にある中で、サンゴ類の急速な絶滅の可能性に衝撃が走りました（図1）。陸上と違って、目にふれにくい海の中で起きている危機が少しずつわかり始めたのです。

日本自然保護協会は同じ年、専門家による「沿岸保全管理検討会」を設置し、沿岸の自然保護のあり方の検討を始めました。みえてきたのは、日本で海洋保護区とされている区域の大半が水産資源の保護を対象としたもので、生物多様性保全を目的に科学的データに基づいて設定された区域はごくわずか、という事実。日本近海の生物の推定種数は15万種以上、固有種は少なくとも1,872種、全海洋生物の約14%が分布すると言われていますが、この海の豊か

さを守る法律もしくみも、まだほとんど整備されていないのです。

砂浜が消えてゆく

日本ではまた、東日本大震災の津波を受けて人々の海離れ、巨大防潮堤の建設が全国に広がりました。その結果、宮城県・岩手県だけでなく、災害対策として多くの砂浜が姿を消しました。砂浜は、海岸線の中でも減少が著しい環境です（図2）。海や陸など個々の自然の細分化や劣化も問題ですが、海岸はそれらをつなぐ移行帯という重要な役割をしています。今世紀末には日本の砂浜の6割が完全に消失という予測もあります（*）。けれども海、特に砂浜は、その生物多様性の価値さえまだ十分に知られていません。

*IPCC（気候変動に関する政府間パネル）の2014年の報告書を基に、国立環境研究所や大学などの研究グループが分析。

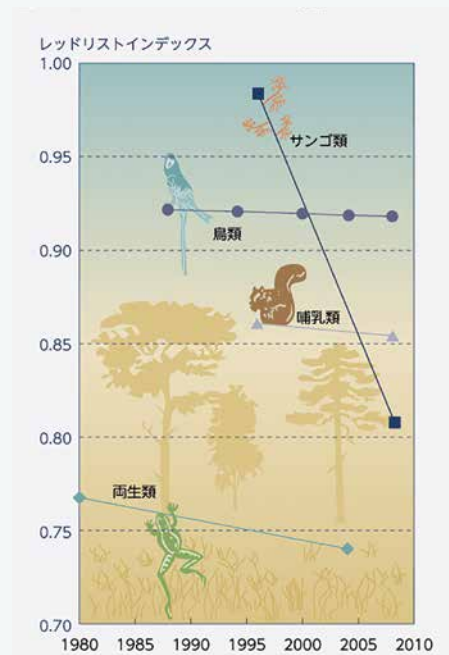


図1 レッドリストインデックスの推移

絶滅のリスクが最も急速に高まっているのはサンゴ類。
『地球規模生物多様性概況第3版』（日本語版）（環境省、2010）

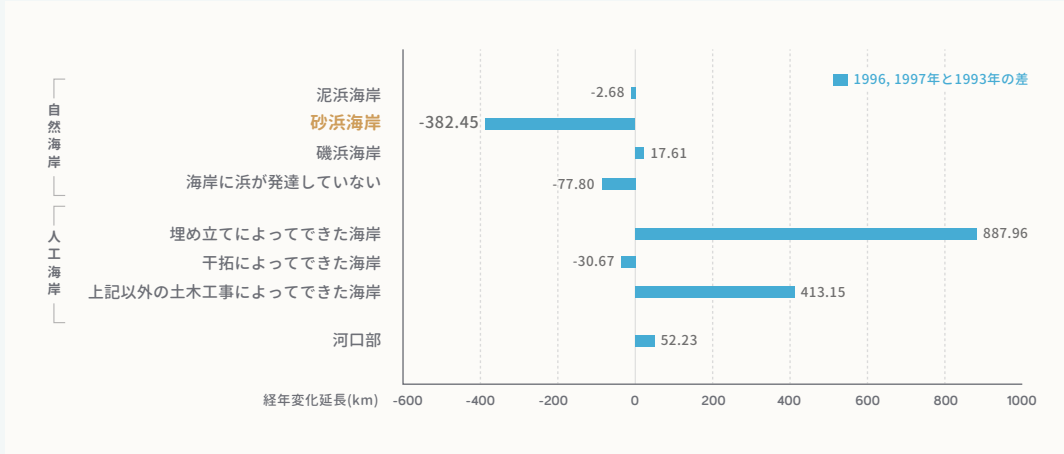


図2 日本の海岸線の変化

横軸の左は海岸線の減少、右は増加を示す。
 上から2つ目の砂浜海岸の減少、上から5つ目の埋め立てや土木工事による人工海岸の増加が目立つ。
 第4回海岸(汀線)区分別延長と第4回海岸(汀線)区分別延長の比較(『第5回自然環境保全基礎調査海辺調査総合報告書』(環境庁、1998.3)にNACS-J加筆

愛知県表浜海岸。陸から海へのつながりが見られる数少ない海岸のひとつ。自然公園にも砂浜生態系保全の視点を入れるなどの見直しが急がれる。

多様化する海の自然保護問題

そして近年、温暖化による自然災害の頻発、海ごみ問題、海中の騒音問題、大規模な洋上風力発電など、海や砂浜での新たな自然保護問題が顕在化してきました。簡単に解決できない問題も多いですが、例えば環境アセスメントによって開発の影響を予測したり、場所によって使い分けるなどして、自然という社会の資産の目減りを避ける方法を見つけることが必要です。人間は自然を利用せずに生きていけないからこそ、将来的に恵みを受け続けられるようにする必要があると考えています。



1 海の保護区 2つの新たな取り組み

豊かなサンゴ礁を持つ辺野古・大浦湾をホープスポット (Hope Spot : 希望の海) に申請、2019年10月、認定海域とすることができました。ホープスポットは米国 NGO ミッションブルーが認定する生物学的、文化的、地域の活動などの面から重要な海域です。世界で約110カ所が認定されていますが、日本では初です。3月24日には、ホープスポットサポーター24,235名分の署名とともに、この海域の一步踏み込んだ保護を要望する意見書を、沖縄県に提出しました。

山口県の上関では、日本初の"海のユネスコエコパーク"登録を目指しています。海の自然を守り、海からの恵みを持続的に利用できる新しい形の保護区づくりに、地元の漁師さんとともに取り組んでいます。



米国 NGO ミッションブルーを率いる世界的な海洋学者シルビア・アール博士から、辺野古・大浦湾へメッセージ



上関での海藻調査

この海域で長年漁業を続けてきた方々とともに、新たな海の保護区づくりの取り組みが始まりました。



小中学校で大好評『砂浜ノート』

海洋プラスチックなどの海ごみ問題をはじめ、砂浜の特徴や自然観察のポイントを分かりやすくまとめました。期間中の申込者に2,500冊以上を配布。現在も4万部を超える配布希望をいただいています。

2

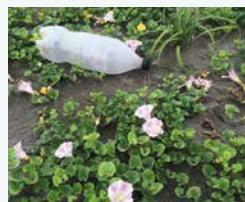
砂浜を見る目を増やす 全国砂浜ムーブメント2019



自然海岸の減少や海ごみなどの問題をひとりでも多くの人に知っていただき、砂浜や海を見る目を増やすことを目標に、砂浜での自然観察など5つのミッションへの参加を日本全国で呼びかけました。期間中に日本自然保護協会が主催、共催、協力した砂浜の観察会とビーチクリーン、指導員研修会は全国8カ所。計165人が参加してくださいました。AIを活用した調査では7,000件を超える生きもののデータが集まりました。

(期間：2019年9月20日～12月31日)





3

海ごみ問題に NGO 共同声明発表

世界の海で深刻な脅威となっている海洋プラスチックごみ問題について、G20大阪サミットでの合意をさらに進め、削減目標付きの国際協定早期設立の提言を日本自然保護協会ははじめ11団体でNGO共同声明として6月に発表しました。

4

自然を破壊しない 再生可能エネルギーを提案

洋上風力発電は再生可能エネルギーへの転換のひとつで必要なものですが、海の生物多様性についての情報が不足のまま計画が大規模化しているため、影響への配慮を提案しました。
(写真は海外の洋上風力発電施設)



今後の活動

→ 海や砂浜の自然を見る目はまったく足りていません。砂浜の生態系保全のための生きものの調査や観察の機会を増やします。

→ サンゴ礁など（絶滅の危険度が高い生物種の多い）沿岸での新たな開発が続いています。計画段階から警鐘をならし、生物多様性に影響がないよう監視をしていきます。

→ 海の自然保護のしくみを強くしていく必要があります。沿岸（砂浜・サンゴ礁・上関のような近海を含む）の保護地を増やすため、制度を研究し、保全する具体的な地域の検討と提案をします。



ご寄付のお願い

[www.nacsj.or.jp/
2020/02/18640/](http://www.nacsj.or.jp/2020/02/18640/)



◀ イヌワシ

絶滅危惧IB類 (EN)

活動地：群馬県みなかみ町
「赤谷の森」・宮城県南三陸地域

イヌワシの生息地に植栽されて放置されている人工林を伐採することで、イヌワシが狩りをできるひらけた環境づくりを進めています。2019年度には、「赤谷の森」で3カ所目となる1haのスギ人工林を伐採し、狩場を創出しました。南三陸地域では、イヌワシが狩りをする環境をつくりながら林業を進めるため、国有林と民有林計3,686haを連携して管理する協定を締結しました。

ウスイロヒョウモンモドキ ▶

絶滅危惧IA類 / 活動地：鳥取県鳥取市

▼ オオルリシジミ

絶滅危惧IA類 / 活動地：長野県安曇野市

日本人の暮らしや農業環境の変化、生息地への過度なシカの進入による草原環境の変化により、草原性のチョウの生息数が減少しています。

チョウの生息数調査や食草を増やす活動、違法な捕獲防止の取り組みを行い、生息数の回復を図っています。



▼ アカウミガメ

絶滅危惧II類 / 活動地：愛知県表浜

アカウミガメにとって砂浜は、産卵のために必須の環境です。しかし砂浜は護岸工事や道路建設によって減少・縮小し、大きな影響を与えています。ウミガメが安心して産卵できる「砂浜生態系」の保護区創設を目指しています。2019年10月には表浜で「砂浜しどういんサミット2019」を開催、自然観察指導員の研修を実施しました。



提供：
NPO 法人表浜ネットワーク

サシバ ▶

絶滅危惧II類 (VU)

活動地：フィリピンルソン島・
沖縄県宮古島市・神奈川県横須賀市・栃木県市貝町

豊かな里山生態系のシンボルで、九州～東北地方で子育てをし、南西諸島以南で越冬するタカの仲間。渡り鳥であるサシバの生息地保全を進めるため、繁殖地、中継地、越冬地が連携しながら、保全活動を行える体制をつくっています。



提供：
四国自然史科学研究センター

◀ ツキノワグマ
(四国地方)

絶滅の恐れのある地域個体群 (LP)
活動地：徳島県・高知県

日本のツキノワグマは地域によって生息状況が大きく異なります。四国では、2017年から3年間の調査の結果、絶滅の危機が極めて深刻であることが分かりました。専門家、地域や行政と連携し、人とクマが共生できる地域づくりを目指して取り組んでいます。



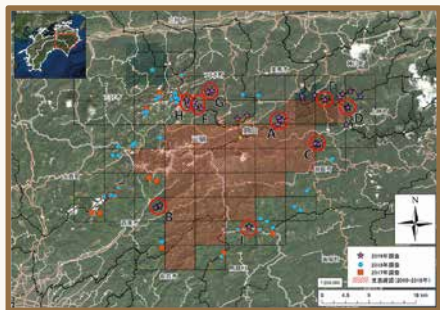
は、2017年から3年間の調査の結果、絶滅の危機が極めて深刻であることが分かりました。専門家、地域や行政と連携し、人とクマが共生できる地域づくりを目指して取り組んでいます。



活動報告：四国のツキノワグマ

3年の現地調査で、危機的状況が明らかに

日本クマネットワーク、四国自然史科学研究センターとともに、2017年から3年間、既に確認されている生息地周辺にのべ146台のセンサーカメラを設置する、大規模かつ詳細な現状把握を進めてきました。結果、生息が確認できた個体数は20頭程度であり、個体群の遺伝的多様性の低下も起こっていることが確認され、極めて危機的な状況が科学的に裏付けられました。



2017年から3年間の調査結果。
2015年までに確認されていた生息地の隣接地9カ所（A～I）でツキノワグマを確認。
しかし新たな個体は1頭のみ。

提供：日本クマネットワーク



四国のツキノワグマの窮状はほとんど知られていません。2020年からの3年間、ツキノワグマの生息地域に密着して、普及啓発と軋轢の予防を進めるとともに、森林所有者と連携した生息地保全、科学的かつ短期的な保全効果の高い取り組みの検討、クマをシンボルとした地域づくりを進めます。2023年までに、行政が主導する具体的な保全体制基盤を構築するため

に、環境省による「希少鳥獣保護計画（鳥獣保護管理法）」の策定を目指し、自治体や環境省等との協働と働きかけを進めます。



ご寄付のお願い

www.nacsj.or.jp/
2019/12/18290/



活動報告：サシバ

「国際サシバサミット2019市貝」を初開催

2019年5月、日本を代表するサシバの繁殖地である栃木県市貝町で、世界初となる国際サシバサミットを開催しました。フィリピン、台湾、宮古島市から代表者が参加し、繁殖地、中継地、越冬地の自治体が連携して保全と地域づくりを進める基盤ができました。

日本最大の中継地である沖縄県宮古島市では、残された樹林帯を保護する「サシバの森」づくりや地元の小中学校の子どもたちを対象とした「サシバ俳句コンテスト」を、神奈川県横須賀市ではサシバが繁殖できる豊かな里山環境再生を目指して約1haの復田作業を開始しました。



2019年5月国際サシバサミット。
宮古島市、市貝町、台湾、フィリピンの代表者。



国際的な協力関係がようやく出来ました。2021年10月には沖縄県宮古島市で、第2回国際サシバサミットを開催予定です。繁殖地、中継地、越冬地の自治体同士が国際的な交流を深めることで、サシバの保全と地域づくりを継続的に推進する体制を構築します。



ご寄付のお願い

www.nacsj.or.jp/
2018/07/11513/

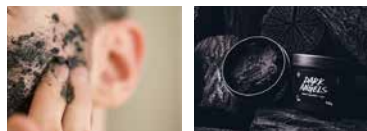




自然保護の活動には、「私たちの暮らし」という視点も欠かせません。自然を守り、自然が豊かになることは、私たちの暮らしを守り、私たちの暮らしを元気にすることにもつながります。日本自然保護協会は、豊かな自然の恵みを地域づくりにも活かす取り組みや、自然保護につながるライフスタイルの提案などにも積極的に取り組んでいます。社会全体から見れば、ひとつひとつは小さな活動ですが、自然とともにある社会の実現に向けてその一翼を担っていきます。

ライフスタイルと自然保護

日本自然保護協会では、私たちの何気ない普段の暮らしが自然を守ることにもつながる社会の構築を目指して、ライフスタイルと自然保護をテーマにした活動にも力を注いでいます。この活動では、日本自然保護協会がもっている全国のネットワークを最大限に活かし、地域や企業と一緒に力をあわせて実施しています。例えば、商品の売上の一部が日本の自然を守る活動へ寄付される企画を実施したり、商品の原材料に自然保護につながるものを提案したり、自然保護をモチーフにした商品を一緒に開発したりしています。2019年度のトピックは、それぞれ写真とともに紹介させていただいているので、ぜひご覧ください。



2

1. (前頁) 石川県の能登半島で里山の保全と地域づくりを目指して炭づくりを行っている大野製炭工場の大野長一郎さん。(撮影:株式会社ラッシュジャパン)

2. 里山の保全にもつながるクヌギやナラなどを使った能登の炭と、その炭を原材料に使っているLUSHのスキンケア商品。(撮影:株式会社ラッシュジャパン)

3. 生物多様性の復元と持続可能な地域づくりを目指す群馬県みなかみ町「赤谷の森」の木材を使って、地元の職人が手づくりした株式会社ネオナチュラルのアロマディッシュ。

4. 消失の危機にある砂浜や海ごみ問題の対処に向け、日清フーズ株式会社と寄付つき商品企画を実施。対象商品には日本自然保護協会のロゴをつけて全国で展開しました。

5. 株式会社マツモトキヨシHDとは、ドラッグストアのマツモトキヨシで販売している花王商品の売上の一部が全国の自然を守る活動に寄付されるキャンペーンを実施しました。



3



4



5

コラム

シカの低密度管理

人よりも古くから日本の森にすみ、私たちの暮らしと深い関わりをもつ野生動物・ニホンジカ。過疎化や狩猟者の減少といった私たちのライフスタイルの変化や、温暖化の影響などで急激に数を増やし、森林の生物多様性低下、農林業被害、水源の森の荒廃などさまざまな問題を引き起こしています。日本自然保護協会はニホンジカとの共存を模索するため、群馬県みなかみ町の「赤谷プロジェクト」で、シカの低密度管理の実証実験を進めています。低密度状態のシカは警戒心が強く、高密度地域で実施されている捕獲技術では捕獲できません。鉾塩（塩のかたまり）でおびき寄せる方法で技術開発を進め、2019年度には高密度地域と同程度の捕獲効率を実現しました。



捕獲試験地に設置した鉾塩に集まるニホンジカ



これらの取り組みでできた企画や商品は、多くの人たちにとっては自然保護のためというよりも、日常生活の中で欠かすことができなかったり、「オシャレ」や「カッコいい」などを動機に手にとるものばかりです。たとえ自然保護のことを意識していなかったとしても、実は自分の日常の行動や選択が自然保護につながっている、そのことを知った時にはさらにカッコいいと思っていただける。そして、このような取り組みが地域や企業にとっても価値になる。そんな社会を目指しています。



企業との
連携事例はこちら

www.nacsj.or.jp/partner



モニタリングサイト 1000 里地調査

モニタリングサイト1000里地調査は、市民が主役となり調査を行う「市民調査」です。全国約200カ所で、毎月、毎週、毎日のように、市民調査員の皆さんが地域の里山に通い、植物や鳥類、哺乳類などの生きものや自然環境を真摯に見つめ、詳細なデータとして記録されています。日本自然保護協会は、この約10年間のデータを「とりまとめ報告書」にまとめ、チョウやホタルなどの普通種が急速に減少していることを発表しました。一方、それぞれの地域では市民調査員の皆さんが主体となり、調査結果を活用した保全を進められています。そんな皆さんの取り組みをご紹介します。



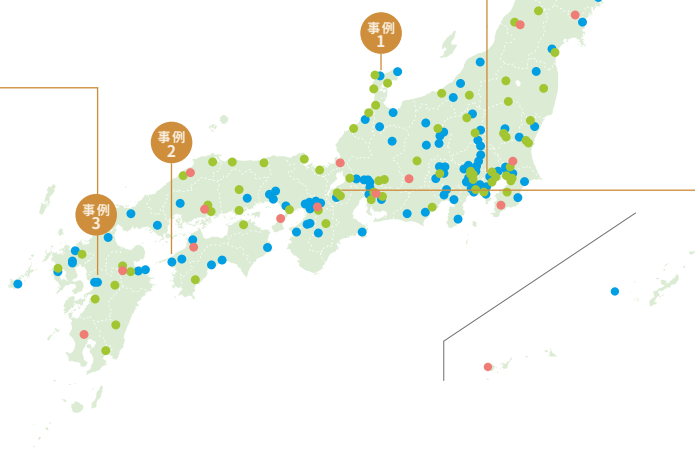
柿原の迫谷
(熊本県熊本市西区)

甲斐原 巖さん

柿原の迫谷に探検隊で調査に入ると、いつも様々な生きものとの出会いがあってワクワクドキドキしています。しかも、調査を継続・分析・紹介することで、この自然をどう未来につなぐのか、どう保全・回復させていくのか、またまたワクワクドキドキしています。

第4期サイト分布図 2020年3月時点

- コアサイト (18カ所)
- 継続サイト (142カ所)
- 新規サイト (78カ所)



宮野入谷戸
(東京都武蔵村山市)

石井 美保子さん

シダもスゲも全く分からなかった私が野草調査に参加したのが12年前。調査のたびに新しい種に逢い、宮野入の植生の豊かさを実感しました。一昨年からルートを増やして全植物の目録を作ろうと計画しています。野草調査は今や私のライフワークです。



みなくち子どもの森
(滋賀県甲賀市)

河瀬 直 幹さん

勤務する自然公園で2008年から、ボランティアとともに植物、カエル類、鳥類、チョウ類の調査を行っています。調査から、センブリやミヤマセセリの消失が分かったため、定期的な植生管理を業務として行うことを提言し、積極的に取り組んでいます。



事例
1



まるやま組での植物観察会
提供：伊藤浩二

石川県では「まるやま組」が、調査に加えて観察会も実施しています。植物の種名だけでなく集落での伝統的な使い方なども自由に共有し、参加者が双方向に学び合う場となっています。調査結果は、地元農家さんが農作物の安全性を表す指標にも使われています。

事例
2



鳥獣被害鳥獣害防止対策協議会の様子
提供：八幡浜新聞 松井一浩

「NPO法人かわうそ復活プロジェクト（愛媛県）」では、哺乳類調査の結果を市の「鳥獣被害鳥獣外防止対策協議会」で共有し、狩猟者やJA、森林組合、警察などの多様なメンバーとともに、農業被害を拡大させないための対策に活用しています。

事例
3



調査地で乱舞するゲンジボタル
提供：吉村秀夫

熊本県の調査地を調査する「NPO法人コロボックル・プロジェクト」では、ホテル等の生息地を守るため、道路建設の事業者へ調査結果を提供し、度重なる熱心な協議の上、貴重な自然環境の価値が理解され、道路照明を減らすなど最小限の開発へと改善されました。



新聞やテレビなど約150のメディアで
報告書の内容が掲載されました



報告書はウェブサイトからも
ご覧いただけます。

www.nacsj.or.jp/media/2019/11/17887/



モニ1000担当 後藤 なな・福田 真由子・藤田 卓

調査開始から15年が経過し、里地調査は里山の重要な変化を捉えました。今回発表した報告書はテレビや新聞など約150件ものメディアで報道され、里山の危機的な現状を広く社会に伝えました。これからも皆さまとともに、里山の保全活用を進めます。



3 自然の守り手を増やす

ラグビー W杯2019で日本代表を支えた合言葉ONE TEAM。
自然保護活動は地域の自然に親しみ、自然の大切さを知り、
自然の変化にいち早く気づける"自然の守り手"が
全国にONE TEAMとなっているからこそ、実ります。



第9回自然観察指導員全国大会・2020大阪「あなたが作るこれから」 新しい自然観察会”
～自然体験活動のトランスフォーマティブ・チェンジ～

10年ぶりとなる自然観察指導員全国大会を2020年1月、大阪で開催し、
新しいビジョンを発表しました。
2日目のワークショップでは「新しい自然観察会活動のアクション
プランを作ろう」に挑戦！ のべ200人以上のご参加をいただき、
大盛況でした。

市民活動推進部 高川 晋一



自然観察指導員

自然観察指導員は自然を見守り、魅力を伝え、仲間を作る人たちです。指導員が誰かとともに自然を観るたび、自然を見守る目が着実に増えています。今や日本の自然保護に欠かせない指導員の皆さまの活動を紹介します！

初心を忘れずマイフィールドを守る

吉武 美保子さん 神奈川県横浜市

社会人になって間もなく、人と自然をつなぐ活動をした
いな、とあちこち話していて「自然観察指導員」に出会
ったという吉武さん。地域の自然は地域の手で守ろう、と
いう気持ちで、横浜周辺の里山保全に関わっていっ
しゃいます。

全国大会では、お久しぶりの方、新しい出会い、全国から
集った「仲間」にワクワクしました！ 原点をふりかえ
ると同時に、これから見つめるきっかけになった
と思います。

私がいま、活動を続けられるのは先達から
多くを学ばせていただいたから。
さて、次のドキドキ考えます。



VISION 2030

自然観察指導員養成事業 2030 ビジョン

全国の指導員の皆さんと共に叶えたい未来のイメージです。

1

過去には自然観察会と結びついていなかったシーンでも自然のしくみや魅力に気づくことのできる機会が社会に溢れており、境遇や自然への関心の高さにかかわらず多様な人が、その機会に参加している。

2

自然観察指導員によって豊かな自然が生まれ、自然との関わりが少なかった人でも何度でも行きたくなる、自然の恵みを実感できる魅力的な場所がある。

3

自然観察指導員は、自然観察や自然保護活動、日常の仕事や生活を通して影響力がある存在で、社会的にかっこいい、信頼感がある、というイメージが世代によらず社会に定着している。

自然体験を通じて 地域の社会課題解決を

増田 由香子さん 婚活de八ヶ岳推進委員会

山梨の豊かな自然を活かした“トレッキングde婚活”や“トレイルづくりde婚活”等の「体験型婚活イベント」のサポートをしている増田さん。全国から参加者が集まり、人口減や少子化対策としてだけでなく、初めての自然体験や新たな価値観のチャンスとなっているそうです！

全国大会に参加してみて、広い視野・異なる視点からそれぞれの地域の社会課題をあぶり出し、解決の糸口としての「自然体験の場づくり」を更に進めることが求められていると感じました。また、

体験の先にある環境問題へ関心を広げるための工夫を今後考えたいと思いました。



全国大会で「アクションプラン」を発表

大熊 勲さん 北海道帯広市

全国大会では、枝や葉を選んで部屋を作り、森で見つけた宝物を隠す、ひみつきち作りのアクションプランを発表してくださった大熊さん。基地を作って良いエリア、材料選びの場、自然観察をアドバイスする指導員を公園に配置して、自然観察をもっと身近にしたい！と語ってくださいました。

データから戦略を練る日本自然保護協会のスタッフも、アツい活動を展開する指導員のみなさんも、みんな会場の玄関先でしゃがんで自然観察してる(笑)。仲間がいる心強さを全身で感じた全国大会でした。冷静にユーモラスに。僕もプランの実現、頑張ります！



自然観察指導員養成計画 2030の詳細はこちら

www.nacsj.or.jp/2020/05/19844/



山に行き、花を見て、笑顔になる。そんな自然のちからが様々な分野に広がろうとしています。自然観察指導員で、認知症介護指導者でもある高橋恵子さんの、自然観察を介護現場へ広げる取り組みを紹介します。

介護施設での自然観察会をやると思ったきっかけを教えてください

一言で言うと、「楽しかったから」ですね。みんなに知ってほしいと純粋に思えました。介護現場では入浴・食事・排泄を三大介護と言いますが、それ以外の楽しみがさらにその人の生活の質を高めるのです。利用者やスタッフにも同じように身近な自然を楽しんでほしいと思いました。そこで、事業所を拠点にして、地域の子どもたちとの多年齢交流の機会を作り、自然観察会やふれあいウォークなどにも取り組んでいます。

ご自身や介護現場にどのような変化を感じていますか？

熊本地震以降、特に頭が締め付けられるようなストレスを感じていました。時々、山野草を見て深呼吸することで、気持ちが晴れていきました。阿蘇や人吉の山に出かけ、花と出会う喜びが、癒し効果となり、体を動かし、心地良い疲れでぐっすり眠れるようになりました。介護事業所の仲間にも自然観察を体験してもらっ

ていますが、参加した認知症高齢者の方の喜びように介護職も触発されるなど、良い連鎖が始まっています。

今後どのようなことをしたいですか？

全国の自然観察指導員の皆さまとつながり、地元の介護現場に興味を持っていただきたいです。ご家族の方がすでにご利用の介護施設もあるのではないかと思います。自然に興味を持ってもらえるようなボランティア活動から始めていただければと期待しています。自然観察指導員と介護現場をつなげるネットワーク活動を推進していきたいです。



高橋 恵子さん

グループホームせせらぎ 代表

看護師・ケアマネジャー・認知症介護指導者

海洋生物学者の夫と一緒に子どもたちと生き物観察をしたりしていたが、2010年頃、自然観察くまもと主催の地元の里山観察会に初めて参加。2015年阿蘇で自然観察指導員講習会に参加し、指導員に。現在、日々の暮らしの中でも楽しく小さな自然観察に出会い活動中。熊本在住。

「自然観察指導員は、最初からなんでも知っているわけではなく、一緒に自然観察の感動を分かち合える人ではないかと思っています。小さな虫や花を見つけたときにルーペを持って一緒に「すごい見つけたね!」と言っただけで、テンションが上がっていきます。知識がある人がいたら、「詳しいですね。また、今度も教えて。」と言えいいのです。仲間を増やしたら、一緒にいろんなことを学んでいけます。私も気持ちよく、うまく乗せられた1人です。」



日本自然保護大賞

すべての個人と団体・企業・自治体・学校等を対象に、日本の生物多様性保全に大きく貢献した取り組みへ毎年賞をお贈りしています。第6回となる今回は、全国から111件のご応募をいただき、大賞3部門に各1件のほか、特別賞として沼田真賞1件、選考委員特別賞2件を選出しました。この賞は、受賞・応募活動の熱意や意欲を後押しし、多世代の方々の魅力とパワーを見出す機会の一つとなっています。日本自然保護大賞2020の受賞活動がさらに広がり、多くの方々の励みとなることを願っています。

(3月22日に授賞式および記念シンポジウムを開催する予定でしたが、新型コロナウイルス感染拡大防止のため、残念ながら延期となりました。)



受賞活動の詳細はこちら

[www.nacsj.or.jp/award/
result_2019.php/](http://www.nacsj.or.jp/award/result_2019.php/)



保護実践部門

株式会社加藤建設(愛知県)
「エコミーティング」活動
～自然を守る現場監督をめざして



教育普及部門

元泉地域農地・水・環境保全組織運営委員会(山形県)
子どもたちとつなぐ、
おらだ田んぼの魅力と田園地域の未来



子ども・学生部門

鈴鹿高等学校 自然科学部(三重県)
日本固有の淡水魚・ネコギギの
保護と普及啓発活動



沼田真賞 阿部 治(東京都)

「国連 ESD の 10 年」への取り組み等と
とした環境教育の発展への貢献



選考委員特別賞 日本野鳥の会東京(東京都)

葛西海浜公園・三枚洲、東京都初の
ラムサール条約湿地登録への貢献



選考委員特別賞 宮部 碧(愛知県)

自分にもできることはなにか～
「猛禽新聞」をととして伝えたいこと

企業との連携

日本自然保護協会では、企業の皆さんと連携した自然保護、生物多様性保全の活動に力を入れています。2019年度もとても活発な1年でした。活動をご一緒させていただいた参加者数は、実に13,637名。連携の幅もさらに広がっています。

※企業との連携についてはp.11「ライフスタイルと自然保護」も合わせてご覧ください。

主な連携企業・団体など

株式会社NIコンサルティング / エヌ・ティ・ティレゾナント株式会社 / カロラータ株式会社 / キヤノンマーケティングジャパン株式会社 / 共同印刷株式会社 / 国会会 / 全国労働者共済生活協同組合連合会 / 株式会社サニクリーン / 三栄商事株式会社 / 株式会社資生堂グループ・資生堂花椿基金 / 真如苑・株式会社一如社 / ソニー株式会社 / 三井住友海上火災保険株式会社 / 大日本印刷株式会社 / 田村駒株式会社 / 株式会社タムラ製作所 / トヨタ自動車株式会社 / 株式会社ニコン / 株式会社日清製粉グループ本社 / 日清フーズ株式会社 / 株式会社ネオナチュラル / 公益財団法人ノビアグリーン財団 / 株式会社バイオーム / 株式会社ピリカ / ペルノ・リカル・ジャパン株式会社 / マッコーリー・グループ / 株式会社マツモトキヨシホールディングス / 三菱商事株式会社 / 三菱地所株式会社 / 株式会社明電舎 / 株式会社山善 / 株式会社ラッシュジャパン ほか多数



p.7でも紹介した「全国砂浜ムーブメント 2019」では、株式会社バイオームと株式会社ピリカに協力してもらい、誰でも気軽に楽しく参加できることを目指してAIの技術を用いたアプリケーションも導入しました。今後も自然保護活動での情報技術の活用に積極的に取り組んでいきます。



トヨタ自動車株式会社とは「自然と共生する工場推進リーダー認定プログラム」を協働で開発し、第1回目となる講習会と試験を実施しました。今後、この活動が継続的に発展し、地域の生物多様性の保全とともにさらなる企業価値の向上につながるよう、マネジメント層向けのプログラムの実施も検討しています。



日本自然保護協会では、企業の皆さんとの連携をさらに強化していきます。特に、自然とのふれあいの機会創出、ライフスタイルと自然保護の融合、情報技術の自然保護活動への転用などを推し進めていきます。

地域でつながるサポーターの皆さん

2019年度も、全国各地で行う調査やイベントを通じてさまざまな業種の皆さんが私たちの活動を知り、サポートしてくださいました。その中から、2019年度、「赤谷の森」（群馬県みなかみ町）を舞台につなごうとした皆さんの声をお届けします。



新居 芹奈さん

ペルノ・リカール・ジャパン株式会社

世界的酒造メーカーのペルノ・リカール・ジャパン株式会社は、「赤谷の森」の地元の木材からコースターやキャシュトレイなどのオリジナルグッズを製作。また、同社のテキーラブランド「OLMECA ALTOS (オルメカアルトス)」の社会課題解決プロジェクト「We Care」を通じてバーテンダーやフラワーデザイナーなど異業種の皆さんを「赤谷の森」に招いたり、ヒノキやクロモジなどの木片をOLMECA ALTOSに漬ける熟成ワークショップを開催するなど、さまざまな形で日本自然保護協会の活動をご支援くださっています。

「赤谷の森のオリジナルグッズの活用は、普段は身近に感じることでできない自然保護に親しみを覚える機会となりました。「We Care」の取り組みでは、スピリッツの業界でも自然保護に対する意識を高めたり、持続可能なコミュニケーションづくりを目指す「OLMECA ALTOS」のDNAの理解を深めて頂けたと感じています。」



山口 長士郎さん 工舎澄み処

「赤谷の森」の麓で、自然を生かした伝統的な木組みの家づくりの工房を営まれています。ペルノ・リカールの木製グッズ製作や、OLMECA ALTOS 熟成ワークショップにご協力いただきました。

「木製グッズの製作では、手に取りたくるような印象深い木目の部分を選んで使いました。熟成ワークショップでは、建材としては不適な材を活用し、その価値を再発見していただきました。「なぜこの樹種なのか」まで参加者の皆様と踏み込んで想いを共有でき、素晴らしい取り組みが生まれたと思います。」



秋貞 美際さん

「migiwa flower」
フラワーデザイナー

東京・麻布十番で花屋「migiwa flower」を運営。「赤谷の森」を訪れ、熟成ワークショップにも参加してくださいました。

「日々の慌ただしさから、歩みをゆるめて自然の中に身をおいてみる。赤谷の森を訪れ、子どもの頃は身近に感じていた自然からどれほど遠ざかってしまっていたかを思い知りました。例えば小さな事でも、環境保全につながる行動が暮らしの一部になるよう、楽しみながら心がけていきたいと思います。」

数字でみる 2019 年度活動実績



寄付金

76,879,199 円



会員・サポーター数

45,012 人/団体/法人



提出した意見書・要望書

21 件



全国への職員・委員派遣

30 件



開催したセミナー・講習会

69 件

メディア掲載件数

1,540 件

ウェブサイト訪問数

932,076 件



Facebook
フォロワー数

9,267 人



Twitter
フォロワー数

6,667 人

モニタリング1000里地調査



調べた場所

238 サイト



調査員

1,380 人



2019年までに集まったデータ

204 万件



2019年までの参加者累計

113,411 人

コラム

ポスト愛知目標への貢献

SDGsを強化するポスト2020 枠組みでのリーダーシップ

ナショナルNGOの立場から、「世界の自然保護」という視野に立って、1988年から継続してきた国際自然保護連合日本委員会(IUCN-J)の事務局運営や、国連生物多様性の10年(2011-2020/UNDB)の展開に取り組んでいます。また、2020年で期限を迎える愛知生物多様性目標に代わる新たな世界目標(仮称ポスト2020枠組み)の設定を2020年に行おうと国際交渉が進行中です。2019年度は、関連会議への参加と国内発信、ユース人材育成などの取り組みを強化しました。愛知目標達成に向けた「にじゅうまるプロジェクト」は、宣言事業数が1000を超え、その10年間の成果を世界に発信できるようまとめました。

● 2019年度決算

正味財産増減計算書

2019年4月1日
～2020年3月31日

一般正味財産増減の部

経常増減の部

(単位：円)

経常収益	312,429,013
運用収入	4,191,674
会費収入	68,149,000
寄付金収入	76,879,199
指定正味財産からの振替額	20,800,000
受託金収入	69,887,607
助成金収入	6,320,000
その他事業収入(資料販売・セミナー等)	65,561,339
雑収入	640,194

経常費用	312,469,069
事業費	293,555,282
保護事業	23,354,201
生物多様性保全事業	28,166,291
自然を活かした地域づくり事業	57,845,650
自然の守り手拡大事業	75,410,791
情報発信事業	47,134,889
その他普及啓発事業	61,643,460
管理費	18,913,787
法人運営(管理費)	18,913,787
当期経常増減額	▲ 40,056

経常外増減の部

経常外収益計	27,620
経常外費用計	8
当期経常外増減額	27,612
当期一般正味財産増減額	▲ 12,444
一般正味財産期首残高	369,611,644

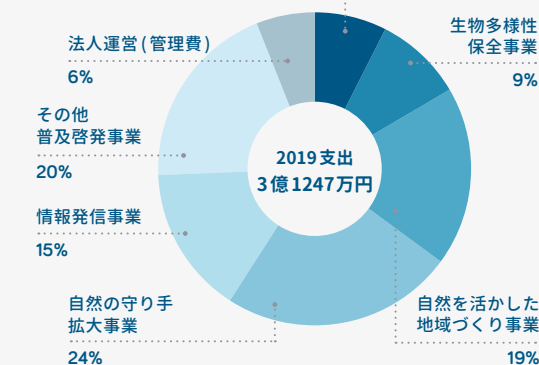
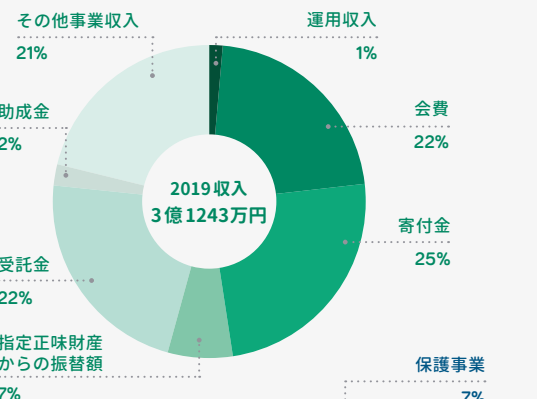
一般正味財産期末残高 369,599,200

指定正味財産増減の部

受取寄付金(指定)	3,000,000
一般正味財産への振替額	▲ 20,800,000
当期指定正味財産増減額	▲ 17,800,000
指定正味財産期首残高	603,500,000

指定正味財産期末残高 585,700,000

正味財産期末残高 955,299,200



※各事業の詳細は次頁をご覧ください

2019年度の決算は、収入が3億1,243万円、支出が3億1,247万円となり、当期増減額は▲4万円となりました。

収入の部では、2019年度も皆様からの会費・寄付が全体の約半分を占めています。遺贈寄付が1件、またイヌワシや四国のツキノワグマなどの絶滅危惧種を保全する支援キャンペーンや、沖縄・辺野古など海の自然を守る活動に多くのご支援をいただきました。

支出の部では、コロナ禍の影響で日本自然保護大賞授賞式やフィリピンサンパツツアー等、一部実施を見送った事業もありますが、大阪での自然観察指導員全国大会をはじめ、企業と連携して行う自然観察会やイベント、各地での調査活動などを活発に実施することができました。

貸借対照表

2020年3月31日現在

資産の部

(単位：円)

流動資産	144,576,166
現金・預金	78,468,708
未収金	62,890,888
貯蔵品	1,977,001
仮払金	300,769
前払費用	938,800
固定資産	907,474,143
基本財産	604,640,000
土地	14,640,000
定期預金等	41,746,528
投資有価証券	548,253,472
特定資産	260,278,000
その他固定資産	42,556,143
資産合計	1,052,050,309

負債の部

流動負債	33,473,109
未払金	22,697,017
前受金	800,000
預り金	1,104,472
賞与引当金	8,871,620
固定負債	63,278,000
退職給付引当金	63,278,000
負債合計	96,751,109

正味財産の部

指定正味財産	585,700,000
一般正味財産	369,599,200
正味財産合計	955,299,200
負債及び正味財産合計	1,052,050,309

● 2020年度予算

収支予算書

2020年4月1日～2021年3月31日

一般正味財産増減の部

(単位：円)

経常収益	295,788,000
運用収入	3,000,000
会費収入	69,900,000
寄付金収入	59,675,000
指定正味財産からの振替額	25,000,000
受託金収入	69,280,000
助成金収入	6,050,000
その他事業収入(資料販売・セミナー等)	62,283,000
雑収入	600,000

経常費用

事業費	287,936,000
保護事業	25,737,000
生物多様性保全事業	22,708,000
自然を活かした地域づくり事業	52,266,000
自然の守り手拡大事業	74,191,000
情報発信事業	51,321,000
その他普及啓発事業	61,713,000
管理費	19,118,000
法人運営(管理費)	19,118,000

当期経常増減額 ▲ 11,266,000

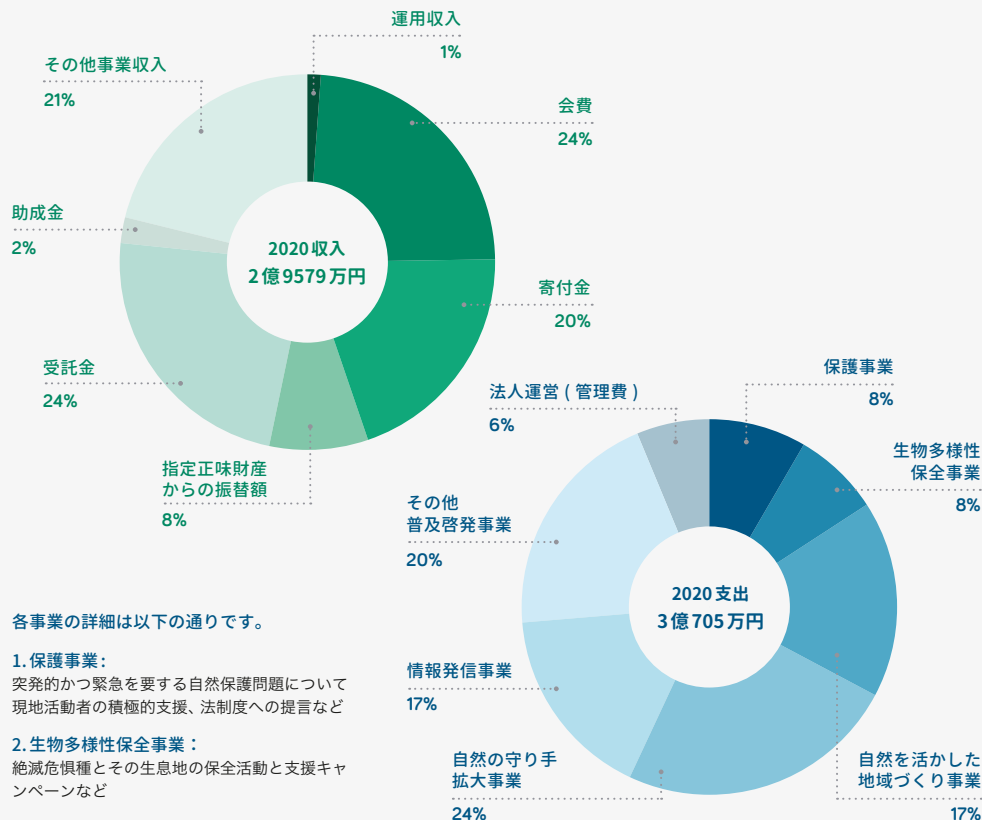
当期一般正味財産増減額 ▲ 11,266,000

一般正味財産期首残高 349,388,443

一般正味財産期末残高 338,122,443

指定正味財産増減の部

一般正味財産への振替額	▲ 25,000,000
当期指定正味財産増減額	▲ 25,000,000
指定正味財産期首残高	▲ 555,555,000
指定正味財産期末残高	▲ 530,555,000
正味財産期末残高	868,677,443



各事業の詳細は以下の通りです。

- 保護事業：**
突発的かつ緊急を要する自然保護問題について
現地活動者の積極的支援、法制度への提言など
- 生物多様性保全事業：**
絶滅危惧種とその生息地の保全活動と支援キャンペーンなど
- 自然を活かした地域づくり事業：**
モニタリングサイト1000里地調査、赤谷プロジェクト、ユネスコエコパーク支援など
- 自然の守り手拡大事業：**
自然観察指導員の養成や企業、地元団体、自治体との連携など
- 情報発信事業：**
広報、会報発行など
- その他普及啓発事業：**
終活寄付対応、日本自然保護大賞、UNDB-Jなど

日本自然保護協会は急激な社会の変化に対応し、自然保護を通じた課題解決を進めるため、「2020-2024中期事業計画」をまとめました。今後5年間、「1.全国規模の自然保護問題の解決と支援」「2.自然保護を通じた社会課題の解決」「3.ふれあいの場と機会、導き手を増やす」を3つの柱として活動を展開していきます。2020年度は特に、活動を支える守り手人材の育成や支援拡大のための広報に注力します。業務効率化をさらに進めながら、より効果的な保護活動を進めていきます。2020年度収支(経常増減額)差額分には、長期的な活動に取り組むための積立資産から一部を取崩し、活用する予定です。

● 役員名簿 2020年6月末現在

顧問

2020年6月29日～2022年6月

大澤雅彦 雲南大学 生態学・地植物学研究所教授
小原秀雄 女子栄養大学名誉教授
田畑貞寿 千葉大学名誉教授

理事

2020年6月16日～2022年6月

亀山 章 東京農工大学名誉教授【理事長】
吉田正人 筑波大学大学院教授 人間総合科学研究科世界遺産専攻長【専務理事】
植原 彰 乙女高原ファンクラブ 代表世話人
神谷有二 株式会社山と溪谷社 自然図書出版部 部長
篠 健司 パタゴニア日本支社 ブランド・レスポンスビリティ・マネージャー
土屋俊幸 東京農工大学名誉教授
中静 透 国立研究開発法人森林研究・整備機構理事長 兼 森林総合研究所 所長
西廣 淳 国立研究開発法人国立環境研究所 室長
藤田 香 富山大学客員教授
藤原正寛 公益財団法人アジア福祉教育財団理事長／東京大学名誉教授

監事

2018年6月11日～2022年6月(鳥山)
2020年6月16日～2024年6月(藤井)

鳥山由子 全国高等学校長協会入試点訳事業部 理事長
藤井美明 公認会計士/PwC あらた有限責任監査法人

評議員

2019年6月～2023年6月

石井 実 大阪府立大学名誉教授
地方独立行政法人大阪府立環境農林水産総合研究所 理事長
井田徹治 共同通信社編集委員
梶 光一 東京農工大学農学部農学部産学官連携研究員
兵庫県森林動物研究センター所長

(評議員つづき)

川北秀人 人と組織と地球のための国際研究所 代表者
北元 均 株式会社デジタルガレージ
小島あずさ 一般社団法人JEAN 副代表理事・事務局長
佐久間憲生 出羽三山の自然を守る会 理事長
高村典子 国立環境研究所 客員研究員
谷口雅保 経団連自然保護協議会事務局 次長/積水化学工業株式会社
西堤 徹 バードライフ・インターナショナル東京 上席アドバイザー
渡辺綱男 IUCN-J 会長/自然環境研究センター 上級研究員

参 与

2018年11月～2020年11月

筋 清 資生堂ジャパン株式会社
足立高行 有限会社応用生態技術研究所 取締役
イルカ IUCN国際自然保護連合親善大使/シンガーソングライター
大熊 孝 新潟大学名誉教授
川那部浩哉 京都大学 名誉教授/滋賀県立琵琶湖博物館名誉学芸員
鬼頭秀一 星槎大学 副学長・共生科学部長
進士五十八 福井県立大学 学長
高野孝子 早稲田大学 教授/NPO法人エコプラス 代表理事
辰野 勇 株式会社モンベル 代表取締役会長兼CEO
中井達郎 国士舘大学文学部 非常勤講師
原慶太郎 東京情報大学総合情報学部 教授
原 剛 早稲田環境塾 塾長/早稲田大学名誉教授
星野智子 一般社団法人環境パートナーシップ会議 副代表理事
本間敏文 NPO法人エコシティ志木副代表理事/NACOT 会員
牧田英彦 建築設計技術家
村上哲生 中部大学応用生物学部 教授
横山隆一 日本イヌワシ研究会 副会長
鷺谷いづみ 東京大学名誉教授

組織図・連絡先



団体名称 公益財団法人 日本自然保護協会 (NACS-J)
所在地 〒104-0033 中央区新川1-16-10 ミトヨビル2F
連絡先 TEL 03-3553-4101(代表) / FAX 03-3553-0139
http://www.nacsj.or.jp/
設立 1951年10月17日
財団法人化 1960年7月19日
公益法人移行 2011年4月
スタッフ 25名 ※2020年6月現在

 www.facebook.com/NACSJ/

 @NACSJ

 @nacsj_official

あなたのご寄付で守れる自然があります

🍷 クレジットカードで寄付する



ウェブ上で決済できる寄付方法をご用意しています。

www.nacsj.or.jp/support/creditcard/

🍷 郵便振替で寄付する

口座番号：00150-2-51775

加入者名：公益財団法人日本自然保護協会

※窓口でのお振込みは手数料が免除になります。払込用紙の「備考欄」に予め「免」とご記入いただき、窓口で「払込手数料免除の口座」とお伝えください。

🍷 継続寄付に申し込む



(入会) 1口5,000円～(年額) で日本自然保護協会の会員としてご登録できます。会員特典もございます。

www.nacsj.or.jp/support/supporter/

🍷 使わなくなったもの

・本で寄付をする

www.nacsj.or.jp/support/others/



🍷 売上の一部が寄付される商品を購入する

www.nacsj.or.jp/support/donation/#howto01/



公益財団法人日本自然保護協会への2000円以上のご寄付は、所得税、一部自治体の住民税の控除対象となります。